

災害文化の醸成・継承そして伝播

山崎 憲治

要 旨

災害文化というタームが定着し始めている。しかしその内容が、未だ、過去の伝承を受け継ぐ、あるいは過去の事実を掘り下げるといった研究で円環を閉じる傾向が強い。「在来知」の範疇から、災害そのものを問うなかで、災害文化をとらえる視座を確かなものにすることが課題である。問われているのは、災害が示す、現代が直面する課題をそこに見出し、未来を築くところに踏み込めるかである。災害文化の醸成・継承そして伝播の内的構造を明らかにし、災害文化の全体像を示すことである。そこには、災害をトータルにとらえる視座が必要だ。さらに災害を通して地域が見えてくるという従来の災害研究を基礎に、基本的人間活動を中間項に置き、被災弱者の視座から災害克服の道が示されるという新たな災害研究の試みである。災害文化に減災・復興の可能性を見ることができるといふ提起である。

キーワード：災害文化、地域課題、基本的人間活動、弱者の視点、減災・復興

はじめに

伝承に見る災害文化の研究

特定地域で頻発する災害に対して発達してきた在来知に関心が向けられてきた。新たに在来知が災害という状況において、どのような過程で形成されるか、地域の社会と歴史の背景に照らして解明することが課題になると災害文化の創造の方向を示している（橋本、林編 2016）。しかし、極めて低頻度の津波災害でも事例は見られる。「津波」を海の神様が起こした警告の大波、で示される事例だ。それは、スリランカ、コロンボにあるチャラニア寺院の仏教伝来の壁画に描かれている。この国の仏教伝来時に巨大津波が発生した事実は海成地層の存在から知られ、その年代測定もされている。仏教布教を妨害すると、海の神様がおこり大波が発生する、在来知しかも壁画で将来にわたって伝えている。低頻度の災害においても在来知として存在する事例はあると考えられる（Kenji Yamazaki and Tomoko Yamazaki 2011）。災害文化の生成を在来知に留めておくことが、災害研究に有効であるかを問い、減災・復興という喫緊の課題解明に焦点を当てた災害研究としての災害文化を措定したい。

在来知の中に災害を見るのではなく、災害

の中に今日の地域が抱える課題を知ることができ、ここに焦点を当てたい。災害を一時の衝撃としてではなく、衝撃から復旧・復興期、さらに予知・警報期までトータルにとらえることが肝心である。そこには地域の課題が顕在化するとともに、将来の地域の姿も映し出される。弱者の立場から地域を見る、減災・復興を論じるうえで最も重要な点だ。災害文化を弱者の視点で検討することに関して、一面的だという批判を受けるかもしれない。弱者の視点は、「北」の成長を第一とするものに対する反措定としての「南」に通じている。「北」の偏在に対して、「南」の遍在を意図している。被災地に生まれる内発型の災害文化の中に、多様性と応用性を見出し、それが地域の課題を解決する方向での地域づくりの共通項を作り出す構造を示すことに、この研究課題を求めたい。

I 章 トータルに災害をとらえる視座

1. 災害は地域が持つ課題を顕在化する

災害を衝撃時に留めずに、復旧・復興期、さらに予知・警報期までトータルにとらえると、それぞれの局面で地域の持つ課題やそれを克服する可能性が暗示されることが少なくない。災害をトータルにとらえることは、災害文化を内在させた災

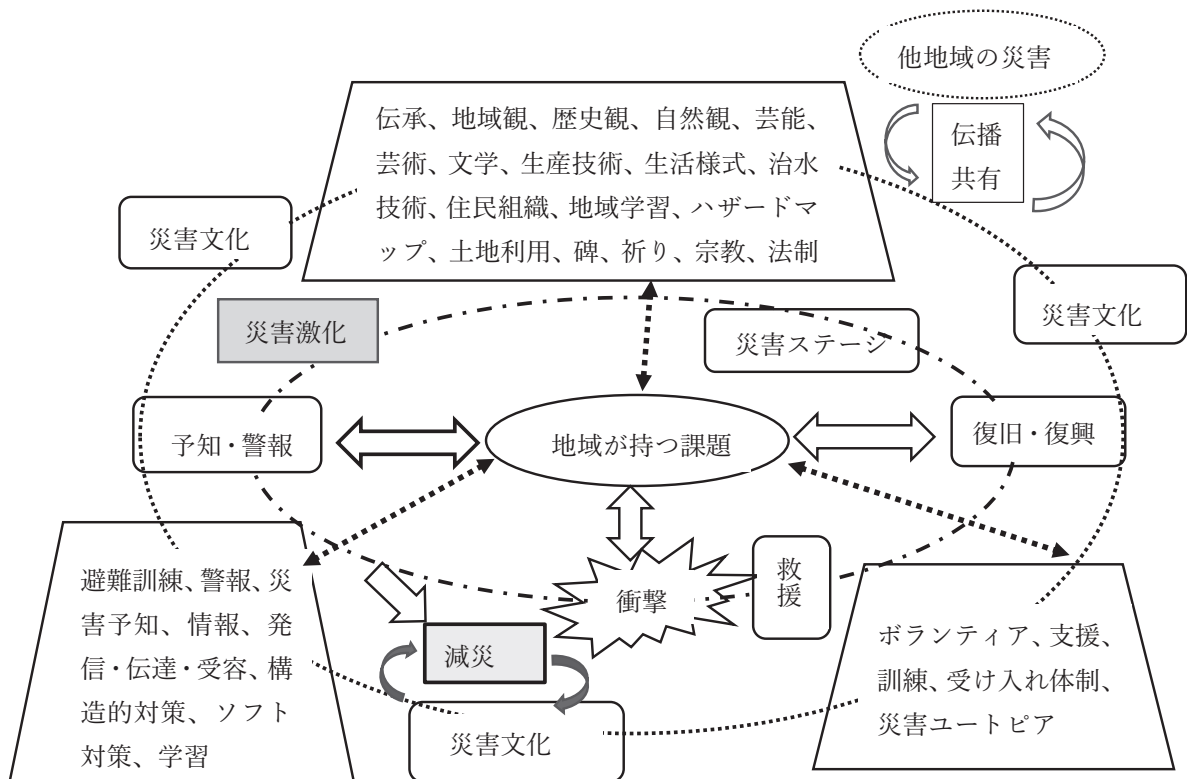
害観を示し、それが切り開く可能性を明らかにすることにつながる。

衝撃は、その地域が持っていた弱点を一気に顕在化させる。災害弱者というタームが示すように、被害は社会の弱い部分に集中する。1933年の津波の犠牲者は年齢階層で見ると、10歳以下の子どもに集中している。だれもが等しく被害を受けるのではなく、その圧力はその時代・地域の持つ弱点である底辺に重くのしかかる^(注1)。東日本大震災では高齢化社会に向かう日本の持つ課題が示された。犠牲者のなかで高齢者が占める割合が6割にも達する数値に、この国の今日の姿が示されている。(山崎 2022)。

Disaster Risk を Hazard × Exposure × Vulnerability ととらえる見方(宮永 2023)は、災害を衝撃時に留めて把握したものである。それぞれの要素を変数として動的にとらえようとするなら、中心に地域・地域課題をもうけ、災害のステージと相互にかかわる構造を把握することが変容する事態を知るうえで肝心と思われる。全体像を通して災害の本質をとらえるという視座が不

可欠である。また、災害の歴史を追うことは、将来を見据えることにつながる。災害は当該地域の自然、社会と深くかかわって発生する。しかも間欠性を有している。さらに自然、社会の変化に対応することで、新たな災害や複合・激化する災害まで射程に入れた見方につながっていく。

第1図は災害の全体像を示している。衝撃にとどまらず、復旧・復興、さらに予知・警報の段階ステージまで含め、災害を全体として把握する図である。災害の各ステージを一点破線で示した。地域が持つ弱点や課題を実線で中心におき、これが巨大な営力によって、一気に顕在化した姿が衝撃だ。衝撃はその時点での地域の課題を映す鏡になる。しかも、その影響は長く続くことも少なくない。特に原子力災害では、長期避難、災害関連死が示すように、長期かつ深刻な被害が続く。復旧・復興、さらには予知・警報のステージでも、変容した地域の課題が反映する。復旧・復興期に見る地域課題は、当該地域の将来像をみる望遠鏡になることも少なくない。



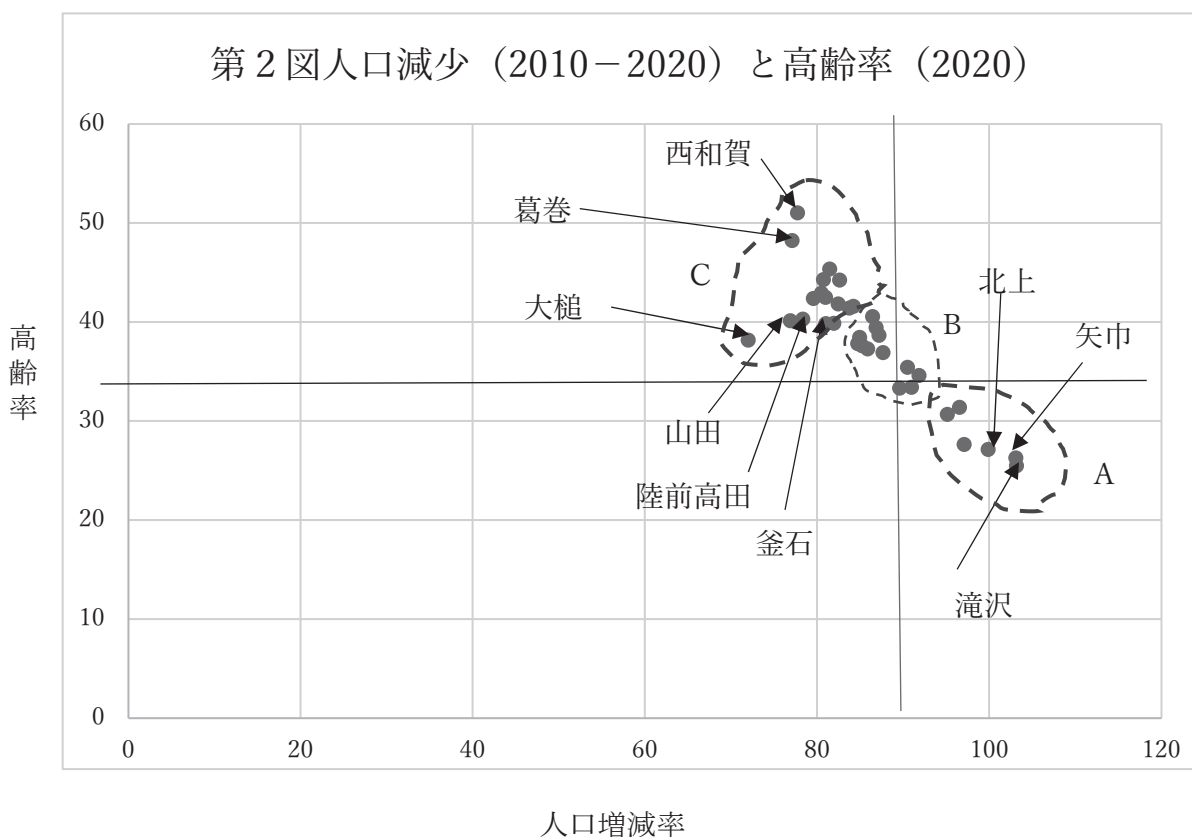
第1図 災害をトータルにとらえる

災害のステージごとに危機が生まれ、それへの対応をとることが期待される。時には対応が新たな課題を生むこともある。これら諸対応まで含めて災害を問い直すことが、減災や復興をつくるうえで不可欠と思われる。危機への対応を、災害文化という新たな枠組みを設けて考察することは災害研究の大きな領域になる。最も外側の破線を災害文化の展開として示した。災害をトータルにとらえるなかで災害文化を位置づけることは、減災にむかう新たな視点を生むことにつながるとされる。

2. 復旧・復興期、予知・警報期に問われるもの

東日本大災害から13年が経過し、ハード面での復旧が進んでいる。しかし、被災地の高齢化・過疎化は厳しくなっているのが現状だ。第2図は岩手県の市町村別の高齢率の現状、人口減少を2010年と2020年で比較したものである。県平均の人口増減率（91.01%）、2020年高齢率（33.4%）

を指標軸におくと、3つのグループに分けることができる。県全体に比較して、人口減少が少なく、高齢率も低い地域（これをAとする）、その対極に高齢化と人口減少が厳しく進んだ地域（Cとする）、県の平均値にまとまったグループ（Bとする）である。Aの共通性は、工業団地や住宅開発、大学病院の移転などの社会インフラの整備が進む新幹線・高速道路に接する地域である。県外も含む投資が盛んに展開している。北上川がつくる比較的広い平地を有する地域にある市町で構成されている。Cグループは中山間地・山間地、あるいは沿岸部の地域で構成される。人口流出率と高齢率がともに高いグループと、相対的に高齢率が低い部分に二分して特徴を考えることができる。西和賀、葛巻のように人口減少が進む中での高齢率の進行は、コミュニティを何とか維持する中で高齢者が生活する姿を示している。高齢化が進んでも、コミュニティが維持されるなら、災害への抵抗力がみられることは岩泉の事例で示されている（山崎 2022）。



一方、人口減少率が高いが、相対的に高齢率が高いとは言えない群がみられる。ここに、大槌、山田、陸前高田、釜石の被災地の市町がふくまれる。高齢率がCグループの中で相対的に低いというのは、高齢者を含む人口流出が起きていることを表している。高齢者を含む人口流出の課題はどこにあるのだろう。被災地では、コミュニティが崩れ高齢者が住みにくくなる状況が生まれていることが想定される。復興住宅に高齢者施設、福祉施設が不可欠であることを示している。復興期における新たな地域課題が生まれていることがわかる。それを地域課題として克服する力にいかにつなぐかが問われている。弱者の視点から復興を問い直すことが、災害研究の起点であることを認識させられる。

予知、警報のステージでも地域に関わって課題は多くみられる。受け手の側から情報の在り方を考えてみる。最も警報が必要な人・地域に警報が届かない事例は東日本災害で多数経験した。津波警報が出たが、3mという最初の警報のあと、電源が途絶え、大津波警報を最も必要とする人にその情報が届かない。同様のことは2004年のインド洋の巨大津波でも起きている。ハワイから津波警報が太平洋、インド海の諸地域に発せられ、それぞれの国の機関にその情報が届くが、肝心の沿岸部の住民はその情報を受け取る手段・方法がない。また巨大な「津波」を想像することができなかった（ジェイムス・コブ、ウォルター・ダットリー 2023）。

国土強靱化政策の下で、南海トラフ地震の発生確率予想の危険度を他の発生予想とは異なる集計から求め、発生頻度を大きく見積もり・発表し、防災計画の「水増し」ともいえる予算獲得を図っている状況も報告されている（小沢 2023）。国土強靱化政策と復興税さらに地域の防災予算獲得が作り出す危機も考えられる。当該地域に比較すれば地震発生は少ないという誤った対応を生む恐れ（能登も胆振も熊本も南海トラフ地震の発生確率に比較すれば低いという「安全神話」）を被災地域に生んでいる。「安全神話」は東日本大震災の避難支援の実際からも学べない状況を作り出す。

能登地震の初期対応の遅れ、支援体制が遅れ、孤立が続く状況が批判されている（斎藤 2024）。一般に原子力発電所の耐震基準は最大加速度1000ガウだが、能登地震での志賀町観測点では2828ガウが計測されている。たまたま志賀原発は運転休止中という「運」があったのだろう。外部電源が一時切れ、変圧器の配管から重油が漏れ、冷却ポンプが一時停止している。最も肝心なことは道路が寸断され、住民の避難が不能になったことである。破壊された家に取り残された人々の救出もままならない状況が生まれたが、そのような状況での原発の避難体制は「想定されていない」を繰り返すばかりである。危機管理がなされないなかで、志賀原発の休止から廃炉への路を確実に進めることが、地域の安全に欠かすことのできない安全確保である。予知・警報の段階で厳しく問われる課題である。

3. 災害文化は災害のあらゆるステージで醸成・形成される

災害は、地域が持つ弱点に集中して現れる。地域の弱い部分に被害が集中する。ならば弱点を知り、その強化に努めれば、災害を克服するばかりか、地域そのものが可能性を持つ豊かさを実現できるという観点で災害を捉えなおす。

災害を衝撃、復旧・復興、予知・警報という一連のものとして把握する。各ステージで地域の課題が反映する。各ステージから、災害から学ぶ、対応する、適応する行動や策（スキル）が生まれる。それらが生活に取り込まれるもの、明示化されるもの、隠されるものがあり、地域に定着していくものがある。

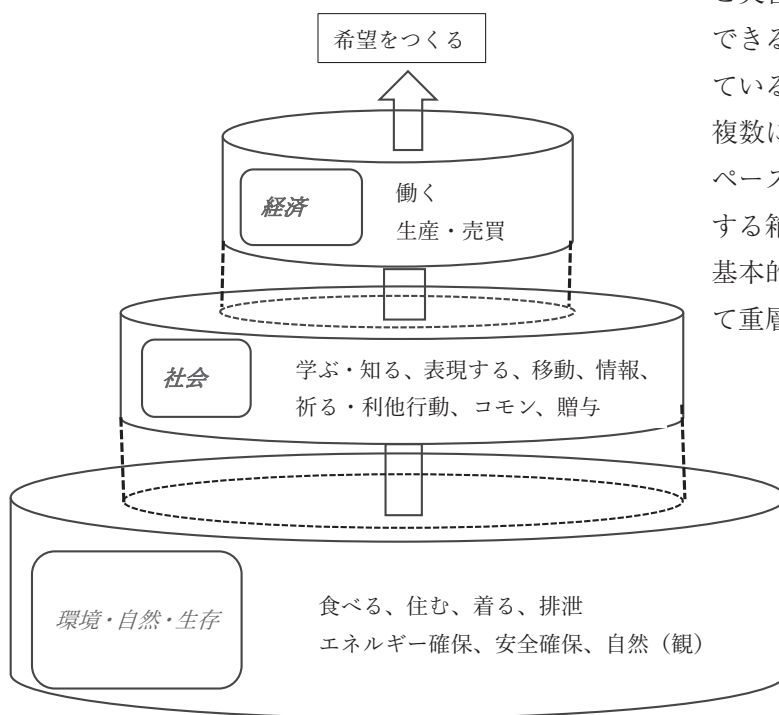
山口晶男は「文化」を「危機に直面する技術」（山口 2009）とした。本研究では災害のステージごとに「災害に直面して生まれるスキル」を諸相として示した。第1図の最外円の一点破線上に台中に示したものが諸相である。この諸相を総体としてとらえ災害文化としてくくってみた。諸相それぞれを精緻化する中に、地域が抱える課題を浮かび上がらせることも可能であろう。そこには災害文化を検討する中から、災害の減災や災害を克

服して災害に強い地域を生む希望も見えてくる。今までとはまったく違った災害のパラダイム転換が展望できる。災害文化の措定と役割は、生産力を第一の指標に成長をはかってきた結果地球そのものの環境を取り返しのきかない破壊に導く「人新世」という時代に差し掛かっていると考えると、重要な位置を占めることになる。以降、これらの課題に焦点を当て論じることとする。

Ⅱ章 災害文化と基本的人間活動

1. 基本的人間活動とは

災害文化は、地域に生活する人々から生まれ、受け入れられることが問われる。そこで基本的人間活動から災害文化を措定してみよう。まず、基本的人間活動とはなにかを論じ、そこから災害文化への橋渡しをはかる。被災という状況に置かれた中で、基本的人間活動をとらえ直してみる。第3図は基本的人間活動の構造を示したものである。



第3図 基本的人間活動の構造

原点に被災を置き、ゼロから何が必要か、作るか、組み立てられるか、を考えてみた。食べる、住む、着る、排泄する、エネルギーを確保する、自然観を得るなど、生存・環境・自然にかかわる活動を基礎に位置づけた。次の階層には社会的活動として、学ぶ・知る、表現する、移動、情報、祈る・利他行動、コモン、贈与を置いてみた。そして、経済活動には、働く、生産・売買、をあげることができる。いずれの活動も、被災という、すべてを失った弱い立場からの出発であり、その先には「希望をつくる」という方向性を持つことで組み立てられる構造を考えた。基本的人間活動は人間を成長させるとともに、相互にかかわりを持って発展する。もちろん社会的存在としての人間だから、成長と発展とは対極の衰退と後退を生むこともある。成長によって生じる負荷が人類を危機にみちびくこともある。原点に立って方向性を問うことが必要である。その方向は社会にとって希望を問うことにつながる。

2. 災害文化の醸成・継承を基本的人間活動と災害のステージから考察する

第1表は災害文化諸相ごとに、基本的人間活動と災害ステージを相互に関連させて、どこに位置できるかを示している。災害ステージをまたがっているもの、あるいは基本的人間活動においても複数にかかわるものもみられるものもあるが、スペースに余裕がないため、できるだけ一つの交差する箱に入れて表現した。一覧表に落とすことで、基本的人間活動を見直す多様な契機が災害によって重層的につくられることを知る。

表 1 災害文化を作る事象を災害のステージと基本的人間活動

基本的人間活動

| 環境・自然・生存 | | | | 社会 | | | | 経済 | | | | | | |
|----------|---------|------------|----------|----------|-----------|-----------|---------|------------|---------|---------|--------------|---------|-------------|----------|
| 食べる | 住む・住宅立地 | エネルギー確保 | 安全確保 | 自然観 | 学び・知る | 表現活動 | 祈り利他的行動 | 情報 | 共同 | 移動 | 交換・贈与 | 働く | 生産・売買 | 希望をつくる |
| 災害のステージ | 非常食の備蓄 | 避難 | 避難行動 | 恐怖 | 被災経験を生かす | 指示 | ボランティア | 情報が得られない誤報 | 危機を知らせる | 交通遮断 | | 命を救う行動 | 生産手段喪失 | 希望をつくる |
| | 郷土の伝統食 | 安全空間確保 | 相互扶助 | | 出来ることを最大限 | 合言葉 | 利他的行為 | | | 集落内避難 | | 利他的行為 | 生産停止 | |
| | 安全な水 | 感染対策 | プリコラーージュ | | | 標語 | 災害ユートピア | 不正確な情報 | 避難行動 | 孤立 | 安全地へ避難 | | | |
| | 緊急支援食 | プライバシートイレ | | | | やさしい日本語 | | 孤立 | | 救出創作活動 | | | | |
| | 感染対策 | 風呂 | | | | | | 安否確認 | | | | | | |
| 復興 | 食糧支援配分 | 土地利用規制 | 避難施設 | 変容した風景 | 災害の見直し | 文学 | ボランティア | 他地域の情報 | 共同で安心 | 救援先遣 | 食料・水配給 | 働く場再建 | 生産手段共有 | 挫折から |
| | 感染対策 | 住宅立地 | | 自然の驚異 | 災害調査 | 記録 | 利他的行為 | 情報の発信 | 役割分担 | 救援隊 | 緊急医療活動 | 支援活動 | 支援金 | |
| | | 住宅かさ上げ | | | | 芝居 | 災害ユートピア | 実情の把握 | | 交通復旧作業 | 救援物資 | 職場復帰 | 共同分配 | |
| | | 安全の見直し | | | | オーラルヒストリー | | | | 仮設交通 | 共同生活 | 共同労働 | | |
| | 食料開発 | 水屋 | | | | 展示館 | | | | 道路鉄道復旧 | 共同生活で得た知を活かす | 職場安全確保 | クラウドファンディング | 受け入れ |
| 復興 | | 住宅の安全立地と再建 | 伝統技術 | | 災害学習 | 碑 | 祈念行事 | 被災の比較検討 | | | | 生きがいと復興 | | 復興の物語 |
| | 集落移転 | 開発転換 | 環境保全 | 畏敬 | 文学 | 慰霊・祈念行事 | | 情報確立手段検討 | コミュニティ | 新交通路整備 | | 共同労働 | 適正規模 | |
| | 町づくり | 新エネルギー | 流域管理 | 自然を受け入れる | 詩歌 | 文学、記録 | | | 自治 | 旧道・新道 | | 共同分配 | | |
| | コミュニティ | 供給体制 | | 親水 | ハザードマップ | 芝居、詩歌 | | 情報確立手段 | 復興の主体 | 通過交通路問題 | | 伝統技術の発見 | | |
| | つくり | | 避難地 | ビオトープ | | 遺構保全 | | | 個々の自立 | 避難計画 | | イノベーション | 持続可能 | 歴史を知る |
| 予知 | 非常食 | 安全確認 | 避難方法 | 自然の驚異 | 災害学習 | 避難情報明示 | 祈念行事 | 情報確立手段整備 | 自治活動として | 移動手段確保 | | 避難体制 | | 困難克服を知る |
| | 食糧水備蓄 | 避難ルート確保 | 避難手段 | 畏敬 | 危機意識の共有 | 弱者へ個別対応 | | 情報獲得手段改善 | 避難訓練 | 避難計画訓練 | | 役割分担 | | 希望の物語を知る |
| | | 避難シュ | 供給ネットワーク | 地域の特色 | 避難訓練 | 手話支援 | | 情報確立手段確立 | 相互支援 | 災害弱者支援 | | | | |
| 警報 | | ミレーション | | | 自然観・災害観 | 標語 | | 訓練 | | | | | | |
| | | | 避難場所確保 | | 正確な情報を得る | 外国語支援 | 避難支援 | 日常生活で使用 | 弱者支援 | | | 避難体制 | 早期避難と方法 | |
| | | | | | | | | | | 地域課題 | | | | |

文学、碑、記録、演劇（芝居）、芸能、オーラルヒストリー、展示館など、メッシュで強調した箱の中におかれたこれらの諸相は、災害文化を典型的に示すものである。これらの諸相が、災害のどのステージで生まれたか、同時に人間の基本的活動との関連を探ってみよう。表中の矢印は、災害のステージ、基本的人間活動との相互関係を示している。これらの諸相は、復旧もしくは復興過程に生まれるとともに、「表現する」という基本的人間活動にかかわるものである。

災害文化を示す諸相と、最もかかわりが深い基本的人間活動との結びつきを考えてみよう。災害文化の諸相がそれぞれの人間活動そのものを問い直すことになる。同時に、個人の成長を実現する契機につながる。諸相の活動に込められたメッセージが、基本的人間活動という共通項を介して、他者に響けば、新たな人間関係や行動が生まれる。さらに新たな関係や行動が最初の発信元へ返されれば、当初の諸相に成長・発展を促し、それが実現されていく。諸相と基本的人間活動に相互の交流が、災害文化諸相の定着、継承につながる。

「食べる・飲む・排泄する」で具体的例から、地域の課題や可能性が見えてくる。衝撃直後、避難生活が強いられる。田老の親戚の家に避難した例では、そこでは十数人が生活を共にしたが、食事時になると備蓄してあった食材を高齢者がうまく料理し、それを共に食べた避難者が活力を得ている。その食事は田老地域での伝統食であり、忘れていた味を思い出すことにつながっていく。食事とともに展開する人間関係を大事にすることが生まれていく。地域の食生活を問い直し、さらには地産地消、新たな食の開発まで展開する可能性も視野に入ってくると思われる。避難生活の中での食が、危機に直面して忘れていた味や食生活を捉え返す契機になっている。避難生活でこのような経験はまれなケースであろう。しかし、日ごろの食を見直す、原点から改めて食を問い直す契機をつくったことは間違いない。

能登半島では地震後3か月を経た5月1日現在7860戸が断水状態にある。安全な水の確保は

復旧で最も肝心なことになる。発災時に井戸を活用することが期待されるが、日常の検査と使用がなされていれば、緊急時の安全な水の確保ができる。古井戸の復活を実現した例が宮古に生まれている。廃業した「つくり酒屋」で酒の原料水を提供していた古井戸をクラウドファンด์で復活、その安全でうまい水を介した交流、イベントが創られつつある。新しい人と人の出会い・関わりを、井戸を介して生もうとしている。「食べる」という基本的人間活動が実現するとともに、復活や再生が新たに展開する点に焦点をあてると、可能性はさらに広がって行く。地域が持っていた「宝物」の再発見が、復興という時間の中で生まれており、このことが災害文化の醸成・継承につながると解釈できる。

自然も同様、重層性と多様性を持っている。河川を考えれば、二つとして同じ流れはない。河相論（安芸皎一 1944）が論じられる所以だが、さらにこの川に人間の労働が入ればもっと複雑な様相をもつ。人々の生活が河川と切り離されつつある現在、堤防に囲まれた川からは、川の持つ豊かさを忘れがちである。生活の中から、あるいは生産の場から積極的に川をとらえることが、地域の自然を知るうえで不可欠の事だろう。災害が起きた直後、その脅威と恐怖はすべての被災者が持つ。しかし最も早くその自然を畏敬の対象として、それが持つ豊かさを実感するのは、その自然から直接生産物を得ている漁民や農民であろう。漁師の畠山重篤は3.11の数か月には植物プランクトンの大量発生をとらえ海の回復を知り、カキ養殖の準備を始めている（2011年秋聞き取りおよび畠山重篤 2019）。生産をとおして「確かな自然観」が創出されている。災害文化諸相と基本的人間活動相互のやり取りが幾重にもなされたら、活動は地域に定着し、地域の厚みのある災害文化を形成することになる。

ボランティア活動は、自らも成長し、活動を進めることで復興が加速するばかりか、他の被災地域でも多様なボランティア活動が展開している。行政側にも受け入れ態勢をつくるノウ・ハウが蓄積されていく。東日本大震災では国際ボラン

ティア活動が展開した。大船渡に拠点を構えたオールハnzは、世界各地とのネットワークを形成し、被災者が世界とつながっていること、支援の輪が広がり、孤立していないことを実感することになった。(James M. Hall and Moto Suzuki, 2016)。

地域に関わって文化が創出されるのだが、地域で生活・生産活動をする人々に起点をもつ。家族や親類あるいは「ご近所さん」から、コミュニティ、まちまで多様性を持つ。さらにそれが重層化あるいは入れ子状になって表出する。被災体験の検証と語り継ぎの実践は (Tomoko Yamazaki 2016, 2021)、地域に着目し、地域を知ることが、危機を乗り越えるうえで不可欠であることを示している。

基本的人間活動に還元する中で災害文化の諸相が持つ影響力が受け手に反映され、受け手の成長になる一方で、他の基本的人間活動にも影響を及ぼすことも少なくない。ここでは、人を介して他の活動が活性化する。利他的活動が、一方で共同の活動を活性化させるように、基本的人間活動を介して他者や他の活動に影響をおよぼす。災害文化の諸相それぞれが、行為者と共に、他者へ、さらに、個人からコミュニティ、地域、にウイングを広げ、それぞれの地域課題に関連し、つながりを持って展開することを問うことになる。これは伝播の種がまかれる機会になる。

3. 災害文化の伝播

個々の具体的災害文化諸相は人間活動を見直す契機になる。同時に人間活動から災害文化を問うという関係が生まれる。地域に根ざす文化が、どのように他地域へ影響を及ぼすか、伝播について考えてみる。地域の自然は他と交換できない。それぞれの地域に人々の営みがあって、風土が形成される。肝心なのは自分たちの足元を掘ることで、適応や可能性を見出せる点に注目したい。

ある地域の災害文化諸相をモデルにし、それが他地域伝播するにはどのような条件が問われるだろうか。地域と地域の対等な関係が成立するのは、

被災・弱者という原点から出発する場合だ。上意下達の関係では災害文化の伝播は難しい。他地域からの移植ではなく、内発化させることで伝播され定着がすすむ。内発化とは、地域に「危機に直面している」という認識が必要であり、「諸相にみるスキル」を当該地域に適応させうる力が求められる。内発化し、その地域の独自の技術になれば、具体的な姿を持って地域に定着する。

一方、地域課題への接近を他地域の災害文化から読み解くことは可能であろう。地域課題の本質への接近や具体的な克服方法を検討するなかに、危機に直面する技術の、他地域からの適応が伝播として生まれてくる。課題に関する掘りさげを精緻化することで、地球規模の課題に接近することも可能となる。災害文化はグローバルな展開が求められている。

Ⅲ章 災害文化の可能性を問う

1. 国土強靱化政策と災害文化の比較検討

東日本大災害を経て国土強靱化計画 (2014 年) がたてられた。強く・しなやかな国土づくりのイメージをとまなうネーミングをもって、大災害後の復興政策として打ち出された。復興増税を基盤にするこの政策に異議を唱えることは、復興を遅らせる行動ととらえかねない性格をもっている。国土強靱化計画はハード・ソフト両面からの見直し、自助・共助・公助を持つ災害対応、地域の特性に応じた整備という基本方針を持っている。しかし、実際の姿は緊急対策としてのハード面の対策であるインフラ整備に重点が置かれ、国土分散化、東京一極集中を解消に向かわせる具体策は一向に進まぬ課題になり続けている。国土強靱計画に関わるハードな復興整備と災害文化が進める対応策を比較対照したものが第2表である。具体的施設や対策をあげてそれぞれの特徴から対比することで、災害文化が進める災害対応が明らかになると思われる。

表2 災害文化と国土強靱化政策

| 災害文化 | | 国土強靱化政策 |
|----------------------------------|----------|---------------------------------|
| 霞堤、緑のダム、土地利用規制、植栽防潮堤、避難路・避難体制整備、 | 具体的施設・対策 | 連続堤防、巨大ダム、スーパー堤防、防潮堤、高台移転、学校統廃合 |
| 地域住民 | 主体 | 国、地方政府 |
| 内発、多様性 | 型 | 中央集権型、巨大化 |
| 自然に返る素材を主 | 素材 | 鉄、コンクリート |
| 多様な方法で実現 | 資金源 | 復興税 |
| ソフトな適応策 | 構築 | ハードな構造物 |
| 草の根民主主義 | 視座 | 上意下達 |
| 多様な展開 | 伝播 | 無し、統一規格で実施 |
| 小規模、等身大 | 規模 | 多くの投資・労働力 |
| 自然に学ぶ、自然への畏敬、生態系を活かす | 対自然 | 自然と自然、自然と人を切り離す、自然は征服の対象 |
| 歴史の中に位置づける | 期間 | 短期間で成果を上げる |
| 危機との緊張関係 | 神話性 | 安全神話を生む |

国土強靱化計画ではハード面での構造的対応を基本としている。巨大化する事業が一気に全国規模で展開する。統一規格で短期に成果を上げることが求められる。何よりも復興税に裏打ちされているから、成果が期待される。成果が安全神話を生むことにつながり、時には想定外という結果に導かれることも少なくない。巨大な構造物で自然への対処を意図するから、自然と人を分断するばかりか、自然そのものの分断が生まれる。コンクリートと鉄を素材とするから、経年劣化は避けられず、施設維持と更新に巨額の投資が必要となる。

災害文化の対応策では、地域課題から導かれる策が多い。内発性であり草の根の技術である。それぞれの地域で持てる、地場の、適応しうる技術あるいはその組み合わせであるがゆえに、巨大構築物に比較して「弱さ」を持つ。しかし、「弱さ」は危機との緊張関係をつくる源泉でもある。これらの技術を歴史の中に閉じ込めるのではなく、現代や未来にどう適応するか・できるかを考え、実施することを課題としている。災害文化による適応策は、自然を克服の対象とするのではなく、自然に学び、畏敬の念をもってその力を利用するという基本的構えを持っている。

それぞれの特色を生かす適応策が求められるわけだが、中央集権型と地域内発型が相互補完で展開することは実際には難しい。Dual-useを追求すること、時間軸を変えてみる、地域を主体にしてみることを試み、最適技術の追求に終止符を打ってはならない。しかし、実際には強大な構造物建設をとまなう事業展開はGDPに直接寄与する。その事業による内需拡大、景気浮揚策につながる。このしくみの中で、被災地では「ひと」「もの」「かね」ばかりか自然あるいは環境が分断され消えていく姿が展開した。災害文化の持つ可能性として、一つ事例をあげてみよう。中世の豪族の館を守る土塁は、東国各地に残っている。それぞれの地域の卓越する植生に覆われていることが多い。文字通り建設されてから千年に近づきつつある歴史を持ち、結果として地域に生きる土塁の姿を保っている。維持・管理の面でも長い時間軸の設定、地域に内在する技術と自然を活用する方法に、積極的な評価を与えるべきだと思える。大槌では震災から生まれたたがれきをコアにしそこに地域に適合した樹木を植栽した防潮堤がつくられている。外部の企業の支援で樹木の苗木がつくられ、地域の子どもの手で植樹されている。木々は順調に生育している。人工の構造物で自然、人間

を分断するのではなく、それぞれの地域の植生を活かした堤防づくりが、時間軸を長くとればとるほど有効性を発揮できるものと思われる。確かに、避難のための時間稼ぎ、あるいは津波の力を弱める役割しか果たせないかもしれない。しかし、地域の力で造った堤防が幾世代にもわたって津波の危機を教える仕事は大きい。

2. 災害文化の立脚点は被災者の眼で災害をとらえ、地域にかえすことにある

災害文化は被災から生まれる弱者を主体とし、弱者の視点からつくられる文化である。中村雄二郎はかつて「南型知」を論じたが（中村 1993）、この知は地域固有のものにとどまらず、その深層において世界につながっている。中村は近代ヨーロッパの資本主義、プロテスタンティズム、古典科学の三位一体の「北型知」への反措定として「南型知」をとらえた。北型知が産業社会を推し進める側で偏在するが、南型知はヨーロッパに留まらず地球規模で遍在している。災害文化が被災という事実から出発し、被害の軽減と復興を実現するという面に焦点を当てれば、そこに「南型知」の姿を見ることができる。この遍在をとらえ直すうえで、基本的人間活動は重要な鍵になると思われる。災害文化を基本的人間活動で捉え直し、個人の発展と共有化による対象の文化の成長の構図を第Ⅱ章で論じた。個人が直面した衝撃時の危機を脱するうえで共通感覚を最大に駆使し行動につなげた例は多くの被災者が語っている^(注2)（三陸河北新報社「石巻かほく」編集局 2012）危機への対応は深層において地球規模でつながる。国土強化政策にはこの種の危機脱出の緊張は見られない、むしろ安全神話がつくられてしまう。この点で両者は異なる。災害文化はそれぞれの地域に遍在することが、広がりの可能性をもつ。

「南型知」が弱者の立場に立ち、「悲しき歴史」から学ぶ熱き可能性を見出すことができる。災害文化が被災を原点に持ち、減災という可能性にむかう方向性をもつ。災害は具体的事実が起点にある。被災は地域の課題が反映されている。その中から生まれた災害文化の諸相には、課題の凝縮さ

れた姿を見ることができる。ここで示されたものは、かかわる人々と地域に立脚する中から生まれている。それを「共（コモン）」をとらえることができる。被災を原点に、みんなが必要なものを、みんなで作り、管理していくという基本型をもつネットワークが生まれれば、凝縮された課題の克服、つまり安全・安心の地域づくりの展望が見えてくる。「共（コモン）」という側面で災害文化を評価するなら、多様なコモンのネットワークを基底に、地域の可能性や実現する方向を示す点で極めて肝心な位置を占めている。これは、生産力第一主義、覇権主義とは明確に一線を画すると思われる。

おわりに

時代は、災害文化の可能性と発展が問われるフェーズに入った。災害文化は適応性において、ハードな施設に比較すれば、勝っているといえる。災害文化の持つ力を、人間と地域から捉えなおしてきた。もう一度、原点に戻り災害文化の展望を探ってみよう。

災害は、地域が持つ弱点に集中して現れる。脆弱性の顕在化は、衝撃時ばかりか、復旧・復興時あるいは、予知・警報時でも現れる。災害を衝撃にとどまらずトータルに見ることが肝腎だ。この視座から、災害は、地域がもつ弱い部分に被害や影響が集中するという特徴は、災害を知る上でもっとも肝心なことだと思われる。ならば弱点を知り、その強化に努めれば、災害を克服するばかりか、地域そのものが持つ可能性や豊かさを実現できるのではと考えることが出来る。

災害を全体として捉えることが必要だ。同時にそれぞれの段階ごとに災害文化が生まれることを知ることが出来た。文化を危機に直面するスキルと解し、危機に人間としてどうかかわるかを問うことが求められる。災害文化を基本人間行動との関わりで捉えてみると、人間そのものの成長を促す契機が作られ、それが再び災害文化の成長を促す構造を見ることが出来た。災害は地域が抱える矛盾や課題の顕在化である。災害文化は地域が持

つ課題を掘り下げる機能を持つ。それは地球規模の課題への接近の路でもある。災害を全体として捉え、被災の眼を持つ災害文化の有効性を知ることとは、「災害の希望学」を導く回路になる。

注

- 1 山下文男 2005『津波の恐怖』東北大学出版会 p.84 では、最も犠牲割合が高かったのは10歳以下 31.6%（人口割合 21.6%）で、次に21歳から 30歳 13.3%（人口割合 16.1%）、さらに11歳から 20歳 12.7%（人口割合 20.7%）が続くことを報告している。ほぼ同じ場所で発生した大津波においても、それぞれの時代で犠牲の年齢層が異なること、災害弱者がそれぞれの時代の社会的背景を示していることがわかる。
- 2 土砂災害の現場調査で、土石流が沢を下るときの鳴動、崩壊前の異常な匂い、木の根がちぎれる音、湧水の色の変化に気づき懸命に避難した等はよく聞かれる。津波の直前に、動物が逃げる、これもよく聞く。2004年インド洋津波において、スリランカでは象が事前に高所へ逃げる例を知ることができた。

参考文献

- 安芸皎一 1944『河相論』常磐書房。
小沢慧一 2023『南海トラフ地震の真実』東京新聞。
斎藤徳美 2024「能登半島地震」～東日本大震災の教訓は生かされたか～口頭発表
三陸河北新報社「石巻かほく」編集局 2012『津波からの生還』旬報社。
中村雄二郎 1993『共振する世界』青土社 p.119
ジェイムス・コブ, ウォルター・ダットリー 千葉敏生訳 2023『津波』みすず書房。
橋本裕之, 林勲男 編 2016『災害文化の継承と創造』臨川書店。
宮永健太郎 2023『持続可能な発展の話』岩波新書. p.190
畠山重篤 2019『牡蠣の森と生きる「森は海の恋人」の30年』中央公論新社. 101-104
山崎友子 2021「災害体験・教訓を受け継ぐ」『科学』vol.91、No5: 458-460 岩波書店
山崎憲治 2018「岩手県の被災地における学校の震災対策と災害学習」『社会科教育と災害・防災教育』明石書店 118-129
山口昌男 2009『学問の春』平凡社新書. 174-193
Tomoko Yamazaki 2016 *The Cases of Two Storytellers Who Experienced Tsunami Disasters Twice in Their Lifetimes Japan after 3/11* University of Kentucky Press 160-175
James M. Hall and Moto Suzuki 2016 *The Role of Volunteering in Post-Tsunami Town Recovery The Experience of All Hands in Ofunato City, Iwate Japan after 3/11* University of Kentucky Press 364-378
Kenji Yamazaki and Tomoko Yamazaki 2011 *Tsunami Disasters in Seenigama Village, Sri Lanka, and Taro Town, Japan The Indian Ocean Tsunami* The University Press of Kentucky

Fostering, Inheriting, and Propagating Disaster Culture

Kenji Yamazaki

Key words

Disaster culture, Regional issues, Basic human activities, Perspectives of vulnerable groups, Disaster mitigation and recovery,

Abstract

The term "disaster culture" is beginning to take root. However, the research tends to be limited to the inheritance of past traditions or the delving into the facts of the past. The establishment of a perspective that questions disasters themselves from the category of "conventional knowledge" will ensure the study of disaster culture. The question is whether it is possible to discover the challenges that disasters present and that we face today, and to step forward to build the future. The question is to clarify the internal structure of the cultivation, transmission, and propagation of disaster culture, and to present an overall picture of disaster culture. This requires a total perspective on disasters. Furthermore, based on the conventional disaster research that reveals the local community through disasters, this is a new approach to disaster research that places basic human activities in the middle term and shows the way to overcome disasters from the viewpoint of the vulnerable victims of disasters. This paper proposes to look at the solid possibility of disaster mitigation and recovery from the field of disaster culture research.